

石川啄木における北海道

一日記と書簡を中心に一

尹在石 *

目 次

- 一、はじめに
 - 二、離郷の背景
 - 三、函館へ
 - 四、札幌へ
 - 五、小樽へ
 - 六、釧路へ
 - 七、おわりに
-

一、はじめに

石川啄木の文学的評価は生活派歌人としてである。日本の明治時代における都市庶民の哀歓を実生活の言葉を持って巧みに表現できたからであろう。

一方、啄木は日本近代文学作家の中で一番伝記研究が多く行なわれて来た作家の一人である。それは啄木研究家の岩城之徳の功績であると言っても過言ではないだろう。

啄木の伝記的事実は岩城之徳によって詳しく調べられているのである。『石川啄木伝』¹⁾には啄木にまつわる細かい事実までもが調べられている。多くの啄木研究者はこういった岩城之徳の伝記研究に基づいて自分なりの啄木研究を行ってきたと思われる。

たとえば、昆豊は啄木における北海道時代について次のように書いている。

* Hanbat大学校教授、日本近現代文学

1) 東宝書房、1955。

一家離散という背骨も凍る現実を背に、函館までの旅費しか調達できなかった啄木が故郷喪失者として妹とともに津軽海峡を渡ったのは、明治四十年五月五日であった。資産も学歴もない啄木を、なんの抵抗もなく受け入れてくれる唯一の自由の国土が、そこにあったからである。啄木の渡道は、渡米志望の代償であり、緊急避難に似た側面を持っている。現実には故郷で食いつめた者が、本州よりも高い報酬が得られる職を求めての一時的な移住であった。²⁾

昆豊は啄木の北海道移住についてその意味を「渡米志望の代償」³⁾であり「緊急避難に似た側面」があったと説明している。ここで昆豊の言う「渡米志望の代償」とは、在米詩人野口米次郎の英文詩集『東海より』に感銘をうけその世界に夢中になり、野口米次郎宛の書簡において「米国行の志望」⁴⁾を述べたことを指す。また、「緊急避難に似た側面」とは、父一禎の宝徳寺住職罷免による生活の苦しみや父の再任運動の挫折による離郷、つまり「故郷で食いつめた者が、本州よりも高い報酬が得られる職を求めての一時的な移住」を指すことであろう。

また、加藤悌三も言葉や説明は異なるにしても同じ脈絡で啄木の北海道の意味を解いている。⁵⁾

では、啄木にとって北海道は彼の人生や文学においてどういった意味を持っているところであろうか。啄木は約一年間の北海道の生活から何を感じ取っていたのであろうか。

本稿では、如上の先行論を踏まえながら、啄木の日記や書簡を中心に啄木における北海道の意味について考えてみたい。

二、離郷の背景

啄木は、一九〇七年（明治四十）五月四日故郷渋民を出て、翌日北海道函館に着いた。次は当時の様子が窺われる啄木の日記である。

予立たば、母は武道の米田氏方に一室を借りて移るべく、妻子は盛岡に行くべし。父は野辺地にあり。小妹は予と共に北海道に入り、小樽の姉が許に身を寄せむとす。一家離

2) 昆豊、『警世詩人 石川啄木』、親典社、1985、p.225。

3) 啄木は1903年（明治36）12月頃、堀合節子より贈られた在米詩人野口米次郎の英文詩集『東海より』に感銘をうけ、1904年1月21日野口米次郎宛の書簡でアメリカと野口への憧れを語っていた。

野口米次郎（1875～1947）英詩人、英文学者、愛知県出身。1893年（明治26）渡米、1902年秋イギリスのロンドンに渡り、英詩集『東海より』（From the Eastern Sea）を1903年に出版、イギリス詩壇からその詩的才能を認められた。

4) 国際啄木学会編『石川啄木事典』、おうふう、p.621。

5) 『石川啄木論』、新樹社、1986。

散とはこれなるべし。昔は、これ唯小説のうちにのみあるべき事と思ひしものを・・・
 ・・・一中略一予遂にこの家を出でつ。下駄の音は軽くとも、予が心また軽かるべき
 や。或はこれこの美しき故郷と永久の別れにはあらじかとの念は、轟々と予が心を捲いて、
 静けく長閑けき駅の春、日は暖かけれど、予は骨の底のいと寒きを覚えたり。

(日記、一九〇七年五月四日)

啄木は一家離散という悲しみに身を嘔まれながら妹と共に北海道へ渡ったのである。妻
 節子と娘京子は盛岡の実家に、母親は浪民武道の米田長四郎方に、父親は野辺地にと
 言う状態だった。まさに「小説のうちにのみあるべき」ことが啄木の家族の現実となつたので
 ある。

啄木が生まれ育てられた故郷を去った理由はなぜであろうか。それについては、父一禎
 の宝徳寺住職罷免と係わっていると思われる。父一禎は一九〇五年、曹洞宗宗務局より
 宗費怠納の責任で住職罷免処分を受けたのである。父一禎の住職罷免は宝徳寺から追
 い出されることを意味する。宝徳寺という寺は家計維持の役割をしていたことから、生活の
 問題が生じたのである。

啄木は父一禎の住職罷免以来、生活に対する恐れを感じていた。つまり、生計の源泉
 であった宝徳寺から追い出されてから、啄木は生計維持者としての役割を強いられていたの
 である。啄木は父一禎の住職罷免の直後、盛岡中学の先輩の金田一京助に次のような
 書簡を書いている。

兄よ、天下に小生の怒るべき敵は唯一つ有之候。そは実に生活の条件そのものに候、
 生活の条件は第一に金力に候。小生は金の一語をきく毎に言ひ難き厭悪と恐怖を感じ申
 候。小生は少なくとも悪人には無之候。然もたゞこの金のために、否金無き為、貧なる為
 に、親の不孝の子となり、友に不義の子と相成るにて候。茫々たる未来の事を思ふ毎
 に、小生はまづこの恐るべき敵に切齒せざるをえず候。

(金田一宛書簡、一九〇五年四月十一日)

ここには、啄木が学歴において、性格において、それゆえに決定的に経済的に不運児
 であったという「生活の条件」がものがたられている。啄木にとって、生活はもはや「恐るべき」
 「唯一つ」の「敵」になっていたのである。

こういった「生活」についての不安は翌年にも変わることなかった。啄木は日記に書いて
 いる。

貧の辛さがヒシヒシと骨に沁む。読むに一部の書も無き今の自分は、さながら重大な罪
 を犯したかの如く、我と我が心に耻しい。蔵書と云つては、自分の「あこがれ」と、古雑誌
 が二三十冊と、その外に売に残した二三部の詩集、新約全書位なもの。

ー 中略 ー 自分が時々抑へきれぬ不快の謀反心に駆られるのは、つまり、糧を与へられ

ぬ自分の精神が、餓の苦しみに堪へかねて暴動を敢えてするのであらうか。又、精神の餓えた部分が、今迄に蓄へた養分をも喰つてしまふがために、自分は今詩をも小説をも書く氣に成れぬのではあるまいか。
(日記、一九〇六年三月二七日)

「貧の辛さがヒシヒシと骨に沁む」惨めな生活の実態、これが啄木の実態であった。「詩人」が「詩」を「書く氣」になれなくては、もはや詩人ではなくはないか。こういう状況の中で、啄木が自棄的に「誰かと思ふ存分喧嘩して見たいと思った。何か魔術でも覚えて、天下の人を存分愚弄して見たい」(日記、一九〇六年三月一三日)と思うのも納得は行くものであろう。

このように啄木は生活に恐れを切実に感じるようになった。啄木は生活維持者としての自分の不適をよく察知するようになったのである。「要するに生活それ自身が戦ひなのだ。特に予自身の性格と境遇とに於いて然るのだ。」(日記、一九〇七年三月四日)と啄木は思ふくらいであった。

そこから啄木が考えざるをえないのは、自分は生活維持者になつてはならないと言うことであつた。異例なエピソードとしてよく話題にされるが、啄木が結婚式に現れなかったのもそういう意思のためではないかと思われる。

啄木は生活を免れる方法、つまり父一禎の宝徳寺住職再任を計るしかなかったのである。一九〇六年(明治三九)六月一〇日、啄木は農繁期休暇を利用して父の宝徳寺住職復歸のため上京して奔走してもみた。

しかし、再任運動は効も奏せず、一九〇七年三月頃になって、ついに父一禎は再任への夢を断念して家出してしまったのである。啄木はその日の感じを次のように書いている。

此一日は我家の記録の中で極めて重大な一日であつた。朝早く母の呼ぶ声に目をさますと、父上が居なくなつたといふ。予は覚えず声を出して泣いた。父上が居なくなつたのではなくて、貧といふ悪魔が父上を迫り出したのであらう。暫くは起き上がる氣分もなかつたが、……殆んど一ヶ年の間戦つた宝徳寺問題が、最後のきはに至つて致命の打撃を享けた。今の場合、モハヤ其望みの綱がスツカリきれて了つたのだ。
(日記、一九〇七年三月五日)

啄木は父一禎の住職罷免以来、「生活」に恐れを覚えながら、その「生活」を免れるために、「殆んど一ヶ年の間戦」いながら「宝徳寺」住職再任への道に傾注してみた。だが、その「望み」は「綱がスツカリきれて了つた」のである。「モハヤ」啄木は生計維持者として、生活のために故郷から一人旅立つしかなかったのである。

三、函館へ

ところで、啄木はなぜ離郷の場所として北海道を選んだのであろうか。当時の北海道は開拓地としての「極北」であった。それについては今井泰子の的確な指摘がある。⁶⁾今井泰子によれば、北海道は「生活条件皆無でありながら」「一旗挙げをことを幻想するロマンチストたち」が好む場所であった。今井がいう「条件」は啄木にとっても同じであった。つまり、一家の扶養者を押し付けられた恐れ、村人の冷たいまなざし、傷付けられた自尊心、そこから啄木がどういう形ででも「一旗挙げ」の突破口を模索するのは必至であっただろう。そして啄木の浪漫的な気質を考慮すれば、北海道は啄木の複雑な心境に応ずることができる適地であったのである。しかも、北海道には「苜蓿社」の文学の仲間たちがいたし、トラ姉もいた。こうして、「函館の生活」、北海道の旅立ちは始まったのである。

「苜蓿社」の友人たちは啄木に住まいや仕事など便宜を与えてくれた。啄木は日記「函館の生活」、「函館の夏」にその頃のことについて詳しく書いている。

着函してわずか六日目は「函館商業会議所に出ることになった」。その一ヶ月の後には「弥生尋常小学校代用教員の辞令を得」た。そして、妻子を迎え、母を迎え「我が函館に於ける新家庭は漸やく賑やかに」なった。また、「雑誌紅苜蓿は四十頁の小雑誌なれども北海に於ける唯一の真面目なる文芸雑誌」であるが、その雑誌の「主筆となり」、「『函館日々新聞』の遊軍記者になって、「月曜文壇を起し日々歌壇を起」こすなど文学的にも充実している。北海道に渡る時、陸奥丸の船上での「我は世界に家無き浪々の逸民なり。」(日記、一九〇七年五月五日)という頼りのない不安な暗い雰囲気はどこにもないのである。今井が「函館時代は、啄木にとっておそらく最後の幸福な青春である。」というのも故無しとは言えないだろう。⁷⁾

しかし、啄木の肩書きは商業会議所の臨時雇、代用教員、遊軍記者である。誇り高い啄木には直に不満の表出があった。そこから、啄木は書いている。

家庭は賑はしくなりたれどもそのため予は殆んど何事をも成す能はざりき、六畳二間の家は狭し、天才は孤独を好む、予も亦自分一人の室なくては物かくことも出来ぬなり、
(日記、一九〇七年九月六日「函館の夏」)

啄木はその「六畳二間」の狭い「家」では、「物」をどうしても書けなかった。「天才」は一人で「孤独」を味わい、高い所に向かって飛翔したかったのである。だが、その不平のためではないだろうが、いわゆる「函館大火」によって啄木は函館を去らねばならな

6) 『石川啄木論』、塙書房、1974、p.181。

7) 前掲書、p.186。

かった。

(大火)

此夜十時半東川町に火を失し、折柄の猛しき山背の風のため、暁にいたる六時間にして函館全市の三分の二をやけり、学校も新聞社も皆やけぬ、友並木君の家もまたやけぬ、予が家も危かりしが漸くにしてまぬかれたり、吉野、岩崎二君またのがれぬ。

(日記、一九〇七年八月二五日)

「学校も新聞社も皆やけ」てしまい、啄木の函館の定着を手伝ってくれた親友の家も焼けたのである。あいにくも災害によって啄木の函館生活は四ヶ月で終わってしまったのである。

四、札幌へ

わが宿の姉と妹のいさかひに / 初夜過ぎゆきし / 札幌の雨 (『一握の砂』)

次に、啄木が足を止めた所は札幌であった。啄木は札幌について書いている。

札幌は大なる田舎なり、木立の都なり、秋風の郷なり、しめやかなる恋の多くありさうなる都なり、路幅広く人少なく、木は茂りて蔭をなし人は皆ゆるやかに歩めり。アカシアの街櫺を騒がせポプラの葉を裏返して吹く風の冷たさ、朝顔洗ふ水は身に沁みて寒く口にのめば甘味なし、札幌は秋意漸く深きなり。一中略一

札幌は詩人の住むべき地なり、なつかしき地なり静かなる地なり、一中略一夜枕につきてより函館の空恋しうて、泣かむとせざるに涙流れぬ、一以下省略一

(日記、一九〇七年九月十五日)

札幌は「孤独」を好む「天才」が「物」を書ける趣のある所であったのか、「四辺の風物が何となく外国風にて風俗も余程内地ばなれが」(書簡、一九〇七年九月二十日、岩崎正宛)して、啄木のエキゾチックな性向にもあったのか、「札幌は詩人の住むべき地なり、」(日記上同)と啄木は綴っている。

しかし、ここもわずかに二週間で去るようになった。もとより、啄木は「一旗挙げ」の心情で渡道したが、それは生活を前提にしたものであった。啄木は書いている。

大いなる田舎町に似て物となく静かに住心地よき札幌に別れ候ふは、小生に於いて決して楽しき事に無之候ひき、しかも十五円の校正子より二十円の記者の方が、貧乏に倦み果てたる小生には好ましかりしに候、且つ小樽には家内共も居る事なり、

(書簡、一九〇七年十月十三日、大島経男宛)

啄木は後に小説『札幌』に「半生を放浪の間に送って来た私には、折りにふれてしみしみ思出される土地の多い中に、札幌の三週間ほど、慌しい様な懐かし記憶を私の心に残した土地は無い。」と書くほどこの地が気に入ったらしい。

五、小樽へ

かなしきは小樽の町よ / 歌ふことなき人人の / 声の荒さよ 『一握の砂』

「住心地よき札幌」を惜しみながら、啄木は生活のため「『俗悪の小樽』といふ代わりに『活動の小樽』と呼ぶ事にしてその悪泥の市」（書簡、一九〇七年十月十三日、大島経男宛）に入った。だが、ここには「母あり、妻子あり、京子の顔を見て、札幌をも函館をも忘れはてて楽しく晚餐を認めたり」（日記、一九〇七年九月二七日）という慰安があった。

啄木は『小樽日報』の隆盛のために「一冊の書を読まず、一通の書信も静かに書く能はざりし」ほどの全力を傾注した。従って、自らいうとおり文学には自然に遠ざかっていた。啄木はそれが気になって書いている。

小生が今迄余りに生活とか其他のために心を労して自分の本領を忘れむとしていた事を自分自身で自覚致し候、忘られたる文士？ 否、自分で忘れむとしたる「誤れる天才」は今はかなき眠りより覚め申候、我が天職は矢張文学の外何物でもなかりき、

（書簡、一九〇七年九月二十日、岩崎正宛）

こういう「天職」から離れている生活の不満のなかで、結局事務長小林とトラブルが起こり、啄木は前後策も考えず、『小樽日報』を退社してしまった。その経緯については岩城之徳が詳しく書いている。⁸⁾

これは勿論、彼の高き自負心のためであろうが、そういう行動の結果はすぐ現実に現れた。啄木は失職のまま、新年を向かえるしかなかった。

来らずてもよかるべき大晦日は遂に来れり。多事を極めたる丁未の年は茲に尽きむとす。然も惨憺たる苦心のうちに尽きむとす。此処北海の浜、雪深く風寒し。何が故に此処迄さすらひ来し。一中略一

夜となれり。遂に大晦日の夜となれり。妻は唯一筋残れる帯を典じて一円五十銭を得来れり。母と予の衣二三点を以て三円を借りる。之を少しづつ頒ちて掛取りを帰すなり。さながら犬の子を集めてパンをやるに似たり。一以下省略一

8) 『石川啄木伝』筑摩書房、1985、p.181。

(日記、一九〇七年大晦日)

一家の生活は「妻は唯一の一筋残れる帯を典じて一円五十銭を得来り。母と子の衣二三点を以て三円を借りる。之を少しづつ頒ちて掛取りを帰すなり。さながら犬の子を集めてパンをやるに似たり。」という状態であった。

当時、質屋を利用せねばならぬ庶民たちの生活の惨めさは『最暗黙の東京』⁹⁾に赤に描かれているが、啄木もその一人になるのを余儀無くされた。

前年の九月に、「本領を忘れむとして居た事」を目覚まし、「我が天職は矢張文学」と文学への復帰を計っていた啄木であったが、こうして再び文学から遠ざかるしかなかったのである。

啄木はこの渡道以来の最大の窮状を友人の沢田信太郎の奔走によって逃れる事ができた。啄木の生涯における友人の性質については国崎望久太郎が「啄木にとって、友人とはつねに彼の自己主張を納得し是認してくれるものであった。あるいは彼の天分を認め甘やかしてくれるものであった。」¹⁰⁾というように、啄木は友人が自分を納得してくれないと、一方は同情を求め、一方は反発を示すのであった。

例えば、啄木は「紛々たる世上の軽浮奴輩は皆我れから去つてしまへばよい。たゞ『我』のため、親しい友のため、深き心の命令のため、我は暫しの間わがつとめの筆を取つた事は、神のみしり、且つ許す所であらう。」(書簡、一九〇四年六月二日、伊東圭一郎宛)と書いているのであった。つまり、啄木にとって友人の意味は常に一方的な「よき」友達であった。

友人の沢田信太郎は啄木を『釧路新聞』へ入社させるため奔走し、それが効を奏し入社が決まったのである。¹¹⁾当時の様子について啄木は日記に書いている。「留守中に恰度沢田君が来て、白石社長からの厚い好意なる——釧路新聞に書いて呉れろといふ原稿の前金として、——十円を置いて行つたとの事であつた。」(日記、一九〇八年一月一〇日)

このように、沢田の斡旋で、啄木は「結局自分は、家庭は当地に残し、単身白石社長と共に一六日に立つて釧路へ行く事になつた」(日記、一九〇八年一月一三日)のである。

そして、小樽の最後の夜を送る。

小樽に於ける最後の一夜は、今更に家庭の楽しみを覚えさせる。持つて行くべき手廻りの物や本など行李に収めて、四時就床。明日は母と妻と愛児とを此地に残して、自分一人雪に埋れたる北海道を横断するのだ!!!

(日記、一九〇八年一月十八)

9) 松原岩五郎、岩波文庫、1988、p.66。

10) 『増訂 石川啄木序説』、法律文化社、1960、p. 34。

11) 国際啄木学会編、『石川啄木事典』、2001、p.312。

啄木は「家庭の楽しみ」を惜しみながら、遅くまで荷造りをし、「自分一人」で「雪に埋れたる北海道を横断」して釧路へ渡るのであった。

朝起きて顔を洗つてると、頼んで置いた車夫がそり櫓を曳いて来た。ソコソコに飯を食つて停車場へ櫓を走らした。妻は京子を負ふて送りに来たが、白石氏が遅れて来たので午前九時の列車に乗りおくれた。妻は空しく帰つて行つた。予は何となく小樽を去りたくない様な心地になつた。小樽を去りたくないのではない、家庭を離れたくないのだ

(日記、一九〇八年一月十九)

啄木はいよいよ小樽を去りながら「小樽を去りたくない」「心地」を、否「家庭の楽しみ」を「家庭を離れたくない」「心地」を押さえ切りながら「列車」に乗ったのである。

六、釧路へ

啄木は釧路へ来てまもなく書いている。

吹く風の寒さは耳を落し鼻を削らずんば止まず、下宿の二階の八畳間に置火鉢一つ抱いては、怎うも怎うもならず、一昨夜行火を買つて来て机の下に入れるまでは、いかに硯を温めて置いても、筆の穂忽ちに氷りて、何ものをも書く事が出来ず候ひし、朝起きて見れば夜具の襟真白になり居り、顔を洗はむとすれば、石鹼箱に手が喰付いて離れぬ事屡々に候、北グルと書いて逃ぐると訓む、北へ北へと参り候ふ小生は、取も直さず生活の敗将、否敗兵にて、青雲の上に居る人の露だに知らぬ夢を、毎夜見居る事に御座候、
一以下省略一 (書簡、一九〇八年一月三十日、金田一京助宛)

釧路はその寒さが「いかに硯を温めて置いても、筆の穂忽ちに氷りて、何ものをも書く事が出来」ない酷寒の地であった。こういった「さいはて」の地で啄木が持っている意識は自分は「生活の敗将否敗兵」であったのである。釧路へ渡る前の小樽での生活の「惨めさ」が以前と滲み出ている。

また、釧路は啄木が短歌で「さいはての駅に下り立ち / 雪あかり / さびしき町にあゆみ入りにき 『一握の砂』」と言うように、また「空知川雪に埋れて / 鳥も見えず / 岸辺の林に人ひとりみき (『一握の砂』)」と歌ったように、日本でも「さいはて」の「寂寥感がにじみ出る」¹²⁾所であった。

啄木は着釧してからある程度の余裕を持つようになってから次のように書いている。

12) 岩城之徳編『別冊国文学NO.11 石川啄木必携』、學燈社、1981、p.98。

釧路へ来て茲に四十日。新聞の爲には随分尽して居るものの、本を手にした事は一度もない。此月の雑誌など、来た俣でまだ手をも触れぬ。生まれて始めて、酒に親しむ事だけは覚えた。盃二つで赤くなつた自分が、僅か四十日の間に一人前飲める程になつた。一中略一 然しこれも不可抗力である。兎も角も此短時日の間に釧路で自分を知らぬ人は一人もなくなつた。自分は、釧路に於ける新聞記者として着々何の障礙なしに成功して居る。あ、石川啄木は釧路人から立派な新聞記者と思はれ、旗亭に放歌して芸者共にもて囃されて、夜は三時に寝て、朝は十時に起きる。一切の仮面を剥ぎ去つた人生の現実、然しながら之に尽きて居るのだ。石川啄木！！

(日記、一九〇八年二月二九日)

啄木は渡道以来、「文学」と離れている自身を顧みながら、生活と文学の両立がいかに難しいのかを適切に感じた。啄木の現実には小樽に待っている家族の窮状であり、そのために「さいはて」の地で「新聞の爲に」「随分尽」すしかない生活であつた。「一切の仮面を剥ぎ去つた人生の現実」に「尽きて居る」しかないのであつた。それはほとんど諦めの状態であつた。だが、ここには「現実」と直面する視野が開かれているのである。啄木はすでに書いている。

新詩社の遺方には臭味があると、自分は何日でも然う思ふ。此臭味は、嘗て自分にもあつた「かも」知れぬ。然し今は無い。豪末もない。此臭味は、ブル臭味である。ガル臭味である。一中略一 新詩社の一派が、自然派に反抗したとて其が何になる。自分は現実の所謂自然派の作物を以て文芸の理想とするものではない。然しながら自然派と云はる傾向は決して徒爾に生まれ来たものではないのだ。新詩社には、恐らく自然派の意味の解つた人は一人も居るまいと自分は信ずる。(日記、一九〇八年一月三日)

この内容は、中山和子が「啄木は北海道での放浪生活を経て『明星』ロマン主義の文学的運命とその限界とを見透すことができた。」¹³⁾という裏付けになるものであり、また、啄木の自然主義への接近を示すものであろう。啄木はその内容を生活から実感し、「卓上一枝」や宮崎大四郎宛の書簡(一九〇八年二月八日)に具体化している。啄木は評論「卓上一枝」に書いている。

一切の生活幻像を剥落したる時、人は現実暴露の悲哀に陥る。現実暴露の悲哀は涙なき悲哀なり。何となれば人一切の幻像に離れたる時唯虚無をみる。一中略一 吾人は自然派の小説を読む毎に一種の不安を禁ずる能はず。此不安は乃ち現実暴露の悲哀也。自然主義は自意識の発達せる結果として生まれたり。而して其吾人に教訓する所は唯一あるのみ。曰く、「どうにか成る。」「成る様に成る。」

また、宮崎宛の書簡にも次のように書いている。

13) 『国際啄木学会 台北大会論集』所収、淡江大学日文科、1992、p.251。

少なくとも僕の目には道德などいふものはない。自他融合の意思と僕の名づくる「愛」はあるが道德は無い。既に霊肉の区別がなくなつて、勝手になれと虚無の宣告を受けた人間にとつては、万事勝手にやればよい。君、實際現在の僕、底の底の思想程明白な赤裸々な思想はないだろう。(書簡、一九〇八年二月八日、宮崎大四郎宛)

このような啄木の自然主義への接近について国崎望久太郎は次のようにまとめている。

こうした形での自然主義の受容は、北海道、特に釧路での生活の実感とわがちがたく結びついている。自然主義は啄木の簡単な思想史的概括によって肯定されたようなものでなく、むしろ彼自信の荒涼たる生活感情を弁護するものとしてあった。啄木の自然主義への接近は、しいて言えば思想的でも文学的でもなかった。特に天溪の現実暴露の悲哀を、彼自身のどうにもしようのない虚無感を説明するものとしてうけとったものであった。¹⁴⁾

この国崎の指摘は啄木の「浪漫的自我の立場の崩壊をほとんど必死になっていくとめようと」する凄絶な生活との闘いを語るものにほかならない。このように啄木が生活のために北海道を転々しながら得た生活の実感は、「文学」から離れている「不安」な内面の「悲哀」を自覚させるものでもあった。または、「崩壊」しつつある「浪漫的自我」の「必死」的な再建を試みるものであった。

啄木は書いている。

然して遂に、「感情の満足なき生活」には到底堪へ得べからざる事を、極度まで経験いたし候ひぬ。人は矢張昔から情の動物に候ひけり。一切が無くとも感情の満足さへあれば、心荒まず。これなき生活は、仮令他の一切を具備するとも、小生如きにはとても駄目に候。人は感情の満足を若き女に求め、家庭に求め、趣味に求めむとす。然れども小生は 一中略一 所詮は之を自己自らに求むる外に途なきを悟り候ひぬ。「創作的生活」(専念創作に従ふ生活)はかくて現在の私の最大なる希望、唯一の希望に候ひき。(二十一日夜) (書簡、一九〇八年四月二十二日、大島経男宛)

かつての漁民の代用教員時代の生活の窮乏と荒涼たる北海道の生活の実感が啄木の意識=浪漫的自我に影響を与えたと言っても、それが啄木の「感情=精神」を根底から左右するものにはならなかった。「感情の満足なき生活」つまり「文学」から離れている生活から「専念創作に従ふ生活」に入る道は離北することを意味した。そこにおいては苦悩せざるを得なかった。苦悩には家計維持者としての責任があったからである。だが、強い「文学」志望は責任感を陵駕した。念願かなって、友人宮崎郁雨の助力により、啄木は「家族を函館に置いて郁雨兄に頼んで、二、三ヶ月の間、自分は独身のつもりで都門に

14) 『増訂 啄木論序説』、法律文化社、1960、p.84。

創作生活の基礎を築かう」(日記、一九〇八年四月九日)と決心し「二十四日。三河丸に乗り込んだ。」(日記、一九〇八年四月二十四日)のである。

七、おわりに

以上のように、啄木の日記や書簡を中心に啄木における北海道の意味について考察してみた。啄木の離郷の背景には父一禎の宝徳寺住職罷免による生活に対する恐れが常に付き纏っていることがわかった。その脱出口が北海道であったと言える。

啄木は函館、札幌、小樽、釧路を転々しながら、生活の実感から生活と文学の両立がいかに難しいのかを痛切に感じ取ったのである。こういった生活の実感があったので啄木の自然主義への接近は可能であったと思われる。この自然主義への接近こそ啄木文学の頂点と言える自然主義短歌＝生活派短歌の母体の一つの軸をなしていると言える。

【参考文献】

- 岩城之徳『石川啄木伝』、東宝書房、1955。
昆豊『警世詩人 石川啄木』、親典社、1985。
国際啄木学会編『石川啄木事典』、おうふう。
加藤悌三『石川啄木論』、新樹社、1986。
今井泰子『石川啄木論』、塙書房、1974。
岩城之徳『石川啄木伝』筑摩書房、1985。
松原岩五郎『最暗黙の東京』、岩波文庫、1988。
国崎望久太郎『増訂 石川啄木序説』、法律文化社、1960。
岩城之徳編『別冊国文学NO.11 石川啄木必携』、学灯社、1981。
『国際啄木学会 台北大会論集』所収、淡江大学日文系、19921。

要 旨

啄木における北海道の意味について、放浪による実生活の発見、または『明星』ロマン主義の文学的運命とその限界とを見透した時期と言うのが先行論の主流であった。こういった先行論を踏まえながら、啄木における北海道の意味について考察する。

啄木の離郷の背景には父一禎の宝徳寺住職罷免による生活に対する恐れが常に付き纏っている。その脱出口として北海道が選ばれた。

啄木は函館、札幌、小樽、釧路を転々しながら、生活の実感から生活と文学の両立がいかに難しいのかを痛切に感じ取った。

こういった生活の実感によって、啄木の自然主義へと接近して行った。この自然主義への接近こそ啄木文学の頂点と言える自然主義短歌＝生活派短歌の母体の一つの軸をなしているのである。

キーワード：北海道、函館、札幌、小樽、釧路、生活、
自然主義、宝徳寺住職罷免

투 고 : 2008. 5. 31

1차 심사 : 2008. 6. 14

2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所: 305-719 대전시 유성구 덕명동 산16-1 한밭대학교 일본어과

電 話: 010-9938-1354

E-mail: jsyun@hanbat.ac.kr